

清水正の

一里一尺

～自然をたずねて～ ⑦

キイロスズメバチ異聞

大変だ！

スズメバチの巣が出来た

八月ともなれば、各地でスズメバチ被害の話題が新聞を賑わします。日本では野生生物による死亡事故のトップは意外と思われるかもしれませんがスズメバチです（厚生労働省

の発表による）。突然スズメバチの話で驚かれたかもしれません。実は昨年の事です。安曇川の山小屋に巨大なキイロスズメバチの巣が道路側の屋根のトラフと谷側の二階デッキの二ヶ所に作られてしまいました。

以前にも屋根トラフのおなじ場所に大きな巣が二度作られています。余程場所が気に入っているのでしょうか？などといっている場合ではない

のですが。最初は気付かないまま九月頃に上を見上げると屋根の下にキイロスズメバチの巣の大きいものが出来ていました。困ったものだと思います。翌日、その下に置いた車を見ると沢山の大きな白い幼虫がボンネットの上に乗っています。上の方ではぶんぶん大きな羽音が聞こえます。見上げるとキイロスズメバチ

が巣の周りを激しく飛び交っています。ただならぬ様子に家に入りロフトの窓から覗くことにしました。スズメバチ観察の絶好の機会と思い見ていたところ、やたらと羽音が近くに感じます。部屋の中にいるのではと思った瞬間、そばにいた妻がぼしっと刺されました。換気口が空いたままで、そこから侵入してきたの



2Fキイロスズメバチの巣



道路側スズメバチの巣

です。急いで救急箱からボイズンリムーバを出し何度か吸引して虫刺されの薬を塗布しました。その後すぐに高島の総合病院に車で行き、診察を受け治療して貰いました。よく考えると山小屋はハチクマの渡り通過点になっており、巣が襲われ巣全体が戦闘態勢になっていたのでしょうか。危険回避は一応出来ましたが巣の処理をしないといけません。自らやるのは危険なので業者をお願いして無事巣はなくなりました。それから毎年は付けてはいるものの、少し観察を怠るとその間に作られてしまいます。

居なくなるまで待とう

キイロスズメバチ持久作戦

そして昨年は二度ならず三度、同じ場所に作られてしまいました。全くこのような危険生物に無賃で宿を貸したつもりはないのですが強引に



落としたキイロスズメバチの巣の残骸
美しい模様と綺麗な六角形の巣が見える

借りられてしまいました。道路側でこれは大変と思っている間に、反対の谷側屋根トラフにも出来て頭を抱える始末です。

取りあえず、前回で学んだ換気口をポリラップとガムテープで塞ぎ進入路を立ちました。そして台風の時木伐採などで世話になった地元の人さんに相談すると、「スズメバチの処理もやるよ」と言うのでお願いしました。それから暫くして下見に來られ巣の出来ている場所を確認されて「ずいぶん高い所だから、直接に影響は少なそうですね。巣は大きいけど

出入り口も一つだし」と言われ、「そうですね、玄関からの出入りや一階の窓を開けていてもそんなに不都合なことではないです」と応えると「それなら、ちよつと辛抱せんならんけど、間もなく晩秋でスズメバチの活動期も終わるから、放置しておいて空き巣になるのを待つというのはどうですか。そしたら無駄な出費も入りませんし」とのことので放置し、冬を越しました。春はすっかり静かになり、キイロスズメバチの出入りもなくなりました。

まさかのオオルリの巣

六月のある日、いよいよ無人いや無蜂となったキイロスズメバチの巣を落とすことにしました。綺麗にとれば中学校の理科室に飾って貰えないかなとも思いましたが、手が届きません。仕方なく二階ロフトの窓から高枝鉋の先を使ってつつき出し



巣立ったあとのオオルリの巣と
数年前、巣の上の巣で育つオオルリの雛



おおりひな

ましたが、思ったより硬くなかなか落ちません。やっと付け根の近くまで落としたところ、巣の脇にコケの緑色が見えました。何でこんなところにコケ?と思ったのですが、「オオルリの巣」が脳裏にふっと浮かびました。キイロスズメバチが巣を作ったところの横にロケ材の梁があり、

数年前二年続けてそこにオオルリが巣作りして子育てをしたことがありました。今度とも思いつつ、とにかく落としました。下にはハチの巣材がいっぱい、綺麗な形のままだのオオルリの巣がありました。すでに雛は飛び立った後なので「良かった」と思い安堵しました。何と自然とは素晴らしい、キイロスズメバチがい終わった巣の陰を使ってオオルリが巣をかける。外からは見えませんが安全な場所です。さすがに母は賢く慎重に場所を選びますといいたいのですが、実は五月の頃に玄關庇のこの梁にもコケで作った巣のようなものが乗っており、下にはその一部が落ちていました。おそらくオオルリが巣を作る途中に何かに襲われてしまったのではないだろうかと思っています。オオルリさんにはまた来て下さいですが、スズメバチさんはもうお断りです。

突然の開花にびっくり

この稿を書いている六月、家々の庭や鉢植えにきりつとした紫のキキョウが満開となつています。七月一日、我が家にも突然キキョウが咲きました。そういうのは昨年もらってきた鉢植えのキキョウがあつたことを思い出しました。背丈の小さな矮化したものでしたが、茎はしっかりしていました。アポイギキョウと言われる種類で、もともとは北海道日高のアポイ岳に自生するものの園芸種です。アポイ岳はかんらん岩といわれる超塩基性岩で形作られており固有種が多い山として知られています。アポイギキョウもその超塩基性の地質によって矮化したものと言われます。ところが、その鉢の周りには背丈の高いものが沢山あったために、光を求めて茎をひょろりと伸ばし、小さくまとまった昨年の姿は見

られません。

条件の違いに姿を変えて生き抜こうとしている姿はいじらしくも悲しくもありました。いや遅しいのかもしれない。

キキョウは秋の花？

キキョウは六月～七月には満開（蘭芸種）。山野に自生するキキョウも七月から八月には咲きます。なのになぜ「秋の七草」になっているの



自生のキキョウ(滋賀県)

でしょうか。いつも疑問に思っていました。それは啓との関わりがあるようです。旧暦では七月から

九月を秋としていましたし、立秋は八月七日（今年）というように、私たちの肌感覚からすれば真夏なのです。秋の七草という脳への刷り込みが、実際との違和をもたらし

ていたようです。秋の七草と言うくらいですから昔は実によりふれた花だったのでしょうか。ところが今では環境省絶滅危惧Ⅱ類、京都府絶滅寸前種という超稀少な花になっています。「ききょうなんてどこでも見えますよ」という声が聞こえてきそうです。確かにどこでも見かけます。しかしそれは園芸種でお寺の庭や個人宅の庭で植えたものではありませんか。山野に自生するキキョウは、今



ホタルブクロ(南丹市)



ダンダンギキョウ
(別名キキョウソウ)(宇治市)

や保全すべき草花のトップと言ってもいいでしょう。

多様な子孫を残すために

キキョウの花が人知れず行っているしたかな生き方を垣間見てみましょう。キキョウの花を見たら、花の中心部を覗いてみましょう。開花してすぐのものは、真ん中に棒状のものが突き出し、その周りには五つの先がもわもわしたものが付いてい

ます。真ん中のものは雌しべ、周りのものは雄しべで、先のもわもわしたものは花粉をためた葯と言われるものです。日が経過すると葯から花粉が飛び出し、次に花粉を出し切った雄しべは倒れます。この間に背を伸ばした雌しべは、花粉が飛ばないのを見て雌しべの先端を開きます。これで他株の花粉を受け入れる用意が出来ました。面倒くさいことをやっているように見えますが、このことによって自家受粉をさげ、生物の多様性（ここでは遺伝子の多様性）を守っているのです。偉大なる種の営みが見える瞬間です。他にもこんなものがあるか探ってみて下さい。ちなみにこのしくみを雌性先熟と言います。

ホタルブクロ、ダンダンキキョウ、ヒナギキョウなどキキョウ科の多くはこのしくみを見せてくれます。

やってみよう、 試してみよう

キキョウの別名に「蟻の火吹き」というのがあります。妙な名前ですよね。何でそんな名前がついたのかと思い調べたところ、蟻がキキョウの花を噛ると、そこに蟻酸が入りキキョウの青葉が赤色に変化し、蟻が火を吹いたように見えると記されていました。もう少し調べると平安時代にキキョウと推定される古名に「阿利乃比布岐」があり、上のような当て字と解釈がなされたようです。これは本当だろうかと実験に及んだのですが、何度やっても蟻が花びらを噛ってくれません。諦めてネットで調べたら、同じようなことをする人がいて矢張りかみつかない。しくくやってやつと咬ませた後、蟻の口元を傷口に触れさせたが変色しませんでしたと結論づけています。別

の説がありました（これは大して面白くない説ですが）、雌しべの開いたものを火吹き竹に見立て、小さいので「蟻の火吹き竹」としたことによるとする説です。いずれにしろ名前の由来はそれなりに面白いです。あんな面白そうな挿話を作り、名前の由来を述べて誰もが納得したら、後世では由来の一説になるかもしれませんね。



ヒナギキョウ(宇治市)